

おわりに

「俺の足を鎌で切ってくれ」

沖縄での調査のことである。その方は、マンゴーハウスで除草のため耕耘機を使っていて、バックした時足を取られ、そのままロータリーに巻き込まれ、足がズタズタになった。駆け寄ってきた方に最初に言われてのが、「俺の足はもうダメだから、鎌で切ってくれ」であった。

全く同じ言葉を12年前、富山県の事故調査で聞いた。棚田を守ってきた76歳の方が車軸耕耘機に巻き込まれ足がズタズタになった。事故から2時間半後、探しに来た奥さんに最初に言われたのが、「俺の足を鎌で切ってくれ」であった。

同じパターンの事故が耕耘機事故の半数を占める。他産業では、これほどワンパターンの事故を起こす機械は使用禁止か、特別の免許所有者にしか使用許可されない。

今回の個別事例報告でも多数の機械的問題点が指摘されている。だが、曰く「事故の件数が多ければ、改善されますが……」、「改善にはお金がかかります。利用者の負担になりますから……」

農業者は個人経営、家族経営が多い。様々な機械的な改善提案があっても、それを持ち込む仕組みがない。今回の報告でも、事故調査に当たった方からも、また事故に遭われたご本人からも多数の改善提案がされている。これらの情報をメーカーの方々に分かる形で伝わる仕組みがぜひとも必要である。

そうしなければ、再び「俺の足を切ってくれ」との叫びを聞くことになる。受傷者や遺族の方々が、つらい体験を敢えてお話下さったのは、事故撲滅への切々たる思いからである。決して無駄にするわけにはいかない。

医療の光を遮るもの

日本の医療水準は極めて高く、かつ問題はあるとは言え、いつでも誰でもが安心してかかる医療保険がある。

しかし、事故発生から1時間以上経ってから発見、では高度医療の光も届かない。

昨年度、そして今年度の事故報告でも、携帯電話がまさに「いのち綱」であった事例が多数報告されている。高齢者の中には、「携帯電話など、この歳で似つかわしくない」と思っておられる方がおられるが、高齢者自身が携帯電話の必要性を切々と訴える事例も報告された。

携帯電話に関する合い言葉は、農作業で一步外に出るとき、「家のすぐ横でも、携帯電話の携帯を」であり、事故にあった時、衝撃で電話が飛んで見失うことがあるので、「携帯電話は、飛び出さないよう、身につける」であり、携帯電話が似つかわしくない年齢と思われる方でも、携帯電話を身に付けずに外に出ると言うことは、パンツをはかずに外にでるの同じであり、「携帯電話の携帯が似合う高齢者」である。

だが一旦治療にたどり着いても、牛に蹴られ頭蓋骨骨折、1週間の入院を勧められるも牛の世話があり1日で退院、など治療の中断も多数報告されている。その結果、治療は長引き、さらには慢性的な腰痛や肩痛を抱えることになった事例もある。

このような時、労災保険に加入されている方からは、経済的心配がなく、休業保障が出たのでヘルパーさんを雇うことができ助かったとの報告も多い。

今回の事例報告では、牛の事故に限って、労災保険の加入に関して記述したが、実際の個別報告書原本には、全て詳細に書かれており、機会を改めて紹介したいと思う。

特に専業農家や法人や集落営農など集団を扱う組織での労災加入は必須である。今後とも関係者の努力が必要である。

農作業事故の社会化を

農作業事故の対面調査時での受傷者の方の共通した第一声は、「あの時、もうちょっと注意すれば良かった」である。ことほど左様に、事故は個人の責任との考えが圧倒的である。しかし、調査を通じて感じるのは、機械や用具・手具の問題、環境の問題、人と環境・道具等のミスマッチ等々、「本人の不注意」ではすまされない大量の課題である。これらは、社会全体の問題として様々な組織が連携して解決すべき課題である。

放射能の除染作業中の事故は、本来全くやらなくてもいい作業を、初めて行つての事故である。何とか地域の果樹を再生しよう必死の思いで取り組まれた伊達みらい農協の皆さん、そして、作業の方々の努力の中で起こった事故を「不注意」で済まされたのではなかったものではない。典型的な社会の問題である。

だが、日本のジャーナリズムは、一部を除いて未だにこの問題を、「社会の問題」として取り上げようとしなない。

今回の調査でも、誰が農作業事故に遭われたのかを探るのが、一苦労。そして、本人の了解、調査日の調整など、事故の実態にたどり着くまでに多くのハードルが存在していた。これは、事故の公式データがなく、個人の内々の問題に秘められているからである。ぜひとも全国的調査の仕組みを作って行かなければならない。

また、現場調査は、事故直後とは異なり、圃場や用水路の水の状態、その他諸々の状況が変わり、事故状況を推測、想像するしかない。その点、救命に直接携わる消防署の救急隊員の方々は、事故現場を直接見ておられる。この方々の情報は、事故の本当の原因を探るのに大変貴重な一次情報である。

今回、茨城の調査では土浦消防署の方々との連携が取れ、事故調査に当たった事例がある。土浦消防署の方々のご協力に心から感謝するとともに、今後、日本全国にこの連携が展開され事故の真の実態解明が進むことを切に望むものである。

いずれにしても、本報告は事故に遭われた方々のご協力はもちろんのこと、調査に当たり多くの方々のご協力があったからこそ実施できたことである。以下に関係機関のお名前を列記して、改めて深甚の感謝を申し上げます。

<調査に当たってご協力をいただいた団体等>

岩手県厚生連、岩手江刺農協共済部、新岩手農協雫石中央支所、岩手中央農協、遠野地方共済組合、伊達みらい農協、福島県農林水産部 農業総合センター農業短期大学校研修部、土浦消防署、土浦農協、千葉県庁農林水産部生産販売振興課、栃木県農業機械士会、佐久浅間農協、越後さんとう農協、上越市農業振興課、富山県農村医学研究会、兵庫県農政環

境部農林水産局農産園芸課、兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センター農産園芸部、島根県農協中央会、菊池地域農協、宮崎県農協中央会、沖縄県庁農林水産部糖業農産課、全国農業機械士協議会、全国農協中央会

以上掲げた以外に北海道では、北海道農作業安全運動推進本部が中心となり数多くの関係者の方々に、また、各地域においても1事例1事例の調査に当たり、数多くの団体、個人の方のご尽力があったことに深くお礼申し上げます。

最後に、主な調査関連会議の出席者名をもって、調査関係者のお名前の紹介とさせていただきます。

1. 第1回全体検討会：調査およびDVD作成の全体の流れの確認

- (1) 開催日時 平成24年6月9日(土) 10:00～12:00
- (2) 開催場所 東京・八重洲富士屋ホテル 5階「つばきあづさ」
- (3) 出席者

| NO | 氏名 | 役職 |
|----|--------|--|
| 1 | 藤原 秀 臣 | 日本農村医学会理事長・ 土浦協同病院名誉院長 |
| 2 | 立身 政 信 | 日本農村医学会副理事長・ 岩手大学教授 |
| 3 | 埜田 和 史 | 日本農村医学会評議員・ 滋賀医科大学准教授 |
| 4 | 志藤 博 克 | 生研センター 主任研究員 |
| 5 | 松本 訓 正 | 日本農業機械化協会専務理事 |
| 6 | 小川 祥 直 | 農林水産省・生産局 農産部 技術普及課 生産資材対策室長 |
| 7 | 今野 聡 | 農林水産省・生産局 農産部 技術普及課 生産資材対策室課長補佐 (機械開発・安全指導班担当) |
| 8 | 澤田 和 宏 | 農林水産省・生産局 農産部 技術普及課 生産資材対策室 |
| 9 | 齋藤 弘 幸 | 農林水産省・生産局 農産部 技術普及課 生産資材対策室 機械開発・安全指導班 安全指導係 |
| 10 | 浅沼 信 治 | 日本農村医学会評議員・ 日本農村医学研究所客員研究員 |
| 11 | 大浦 栄 次 | 日本農村医学会評議員・ 富山県農村医学研究所主任研究員 |
| 12 | 常松 敦 子 | 日本農村医学会事務局長 |

2. 農作業事故の対面調査、事前研修会

調査に当たって昨年と同様、極力全国各地で行われる調査方法の共通化を図るため、調査方法に関する事前研修会を開催した。

- (1) 開催日時：平成24年6月28日（木）10：00～15：00
- (2) 開催場所：全国厚生連会議室
- (3) 出席者

| 団体名 | 部 署 | 役 職 | 氏 名 |
|----------------|-------------------------------------|--------|-------|
| 一般社団法人日本農村医学会 | | 理 事 長 | 藤原 秀臣 |
| 岩手大学保健管理センター | | 教 授 | 立身 政信 |
| 生研センター | | 主任研究員 | 志藤 博克 |
| 全国農業機械士協議会 | | 会 長 | 伊藤 一栄 |
| 日本農村医学研究所 | | 客員研究員 | 浅沼 信治 |
| 富山県農村医学研究所 | | 主任研究員 | 大浦 栄次 |
| 日本農村医学研究所 | | 主任研究員 | 柳沢 和也 |
| 農林水産省 | 生産局農産部技術普及課 生産資材対策室 | 室 長 | 小川 祥直 |
| 農林水産省 | 生産局農産部技術普及課 生産資材対策室 機械開発安全指導班 | 課長 補佐 | 今野 聡 |
| 農林水産省 | 生産局農産部技術普及課 生産資材対策室 機械開発安全指導班 | 企画専門職 | 高野 守 |
| 農林水産省 | 生産局農産部技術普及課 生産資材対策室 機械開発安全指導班 | 安全指導係長 | 澤田 和宏 |
| 農林水産省 | 生産局農産部技術普及課 生産資材対策室 機械開発安全指導班 | 安全指導係 | 齋藤 弘幸 |
| 生研センター | | 主任研究員 | 積 栄 |
| 酪農学園大学 | 酪農学部酪農学科 農業工学研究室 | 教 授 | 高橋 圭二 |
| 北海道農作業安全運動推進本部 | | 事務局長 | 舘山 則義 |
| 岩手大学 | 農学部農学生命課程 生物産業科学コース | 教 授 | 武田 純一 |
| 岩手大学 | 農学部農学生命課程 生物産業科学コース | 4年次学生 | 富着いちこ |
| 福島県農業協同組合中央会 | 農業振興課 | 考 査 役 | 小原 稔 |
| 全国農業機械士協議会 | 栃木県農業機械士協議会 | 会 長 | 小田林徳次 |
| 栃木県農業機械士協議会 | | 副 会 長 | 綱川 欣典 |
| えちご上越農協 | 営農生活部 農業経営サポートセンター | | 清水 薫 |
| 三重県農業協同組合中央会 | 農政対策課 | | 中川 文雄 |
| 滋賀医科大学 | 社会医学講座衛生学 | 助 教 | 辻村 裕次 |
| 兵庫県農業機械化協会 | | 主 事 | 岸本 美樹 |
| 広島県農業協同組合中央会 | 農政営農部 | | 南部美沙子 |
| 久留米大学 | 医学部 | 非常勤講師 | 末永隆次郎 |
| 一般社団法人 日本農村医学会 | | 事務局長 | 常松 敦子 |
| 一般社団法人 日本農村医学会 | | 事務局員 | 田村 明加 |

3. 事例検討会

全国各地の調査員が調査事例を紹介、それぞれの事例に対して、出席者による質問とディスカッション

(1) 開催日時 平成25年2月7日(木) 11:00~17:00

8日(金) 9:00~15:00

(2) 開催場所 東京・全国厚生連会議室

(3) 出席者

| No. | 団体名 | 部署 | 役職 | 氏名 |
|-----|----------------|-----------------------------|------------|-------|
| 1 | 日本農村医学会 | (総合病院土浦協同病院名誉院長) | 理事長 | 藤原 秀臣 |
| 2 | 日本農村医学会 | (岩手大学教授・保健管理センター長) | 副理事長 | 立身 政信 |
| 3 | 全国農業機械士協議会 | | 会長 | 伊藤 一栄 |
| 4 | 日本農業機械化協会 | | 専務理事 | 松本 訓正 |
| 5 | 日本農業機械化協会 | | 指導部長 | 森田 豊 |
| 6 | 生研センター | | 主任研究員 | 志藤 博克 |
| 7 | 生研センター | | 研究員 | 岡田 俊輔 |
| 9 | 日本農村医学会 | (久留米大学医学部非常勤講師) | 評議員 | 末永隆次郎 |
| 10 | 日本農村医学会 | (富山県農村医学研究所主任研究員) | 評議員 | 大浦 栄次 |
| 11 | 日本農村医学会 | (佐久総合病院健康管理部長兼日本農村医学研究所副所長) | 評議員 | 前島 文夫 |
| 12 | 日本農村医学研究所 | | 研究員 | 広澤三和子 |
| 13 | 農林水産省 | 生産局 技術普及課 | 生産資材対策室長 | 小川 祥直 |
| 14 | 農林水産省 | 生産局 技術普及課 機械開発・安全指導班 | 係長 | 高野 守 |
| 15 | 農林水産省 | 関東農政局 生産部生産技術環境課 | 係長 | 佐藤 正典 |
| 16 | 農林水産省 | 北陸農政局 生産部生産技術環境課 | 係長 | 大塚 春巳 |
| 17 | 農林水産省 | 東海農政局 生産部生産技術環境課 | 係長 | 森 信隆 |
| 18 | 農林水産省 | 中国四国農政局 生産部生産技術環境課 | 係長 | 西野 史洋 |
| 19 | 北海道農作業安全運動推進本部 | | 事務局長 | 舘山 則義 |
| 20 | 福島県農業協同組合中央会 | 農業対策部農業振興課 | 課長補佐 | 小原 稔 |
| 21 | 土浦市消防本部 | 警防救急課 | 課長補佐 | 鈴木 和徳 |
| 22 | 全国農業機械士協議会 | 栃木県農業機械士協議会 | 名誉会長 会長 | 小田林徳次 |
| 23 | 栃木県農業機械士協議会 | | 副会長 | 綱川 欣典 |
| 24 | JAえちご上越 | 営農生活部 農業経営サポートセンター | | 清水 薫 |
| 25 | 三重県農業協同組合中央会 | 農業対策部 | | 中川 文雄 |
| 26 | 滋賀医科大学 | 社会医学講座衛生学 | 助教 | 辻村 裕次 |
| 27 | 兵庫県農業機械化協会 | | 主事 | 岸本 美樹 |
| 28 | 広島県農業協同組合中央会 | 農政営農部 | | 南部美沙子 |
| 29 | 全国農業協同組合中央会 | 営農・農地総合対策部 営農企画課 | 審査役 | 加藤 和久 |
| 30 | 全国農業協同組合中央会 | 営農・農地総合対策部 営農企画課 | 副主査 | 荒木 大輔 |

【事務局】

| | | | | |
|----|---------|--|------|-------|
| 31 | 日本農村医学会 | | 事務局長 | 常松 敦子 |
| 32 | 日本農村医学会 | | 事務局員 | 田村 明加 |

平成25年 3月

発行 一般社団法人 日本農村医学会

〒100-6827 東京都千代田区大手町1-3-1

(JAビル27階)

TEL 03-3212-8005 FAX 03-3212-5008

印刷 中央印刷